

カール・デュ・プレルの心霊研究における科学と発達

熊谷 哲哉

はじめに

心霊写真や交霊術や空中浮揚といった、不可思議な現象は、今日の私たちにとっても、興味深いものであるし、死後に私たちの記憶や精神活動はどのように存続するのかというのは、いまだ解けない謎である。しかしながら私たちの多くは、これらの現象が、もはや大学で行われているような心理学や物理学の研究対象ではないことは知っているし、それどころか“心霊現象”として伝えられるものなど、ほとんどがウソであるということもよく分かっている。だが、わずか100年ほど前には、多くの自然科学者や知識人たちが大衆も巻き込んで、真剣にオカルト現象の解明に取り組んでいたのである。1850年代に始まる、近代における心霊主義の流行は、単に迷信深い時代の名残りとして片づけることはできない。鉄道・飛行機・写真・映画などの、現代に通じる科学技術が開発された時代において、なぜ人々はこれらの心霊現象に魅せられたのだろうか。人々が考えていたことは、何だったのだろうか。人間の精神活動における不可思議な部分への関心、そして生と死といった世界観への問いというのは、現代に生きている私たちにおいてもまだまだ不可解な部分が多い分野であるし、100年前の問いを掘り起こすことが、私たちが気づかなかった、過去から現在への連続性に目を開かせ、そして私たちが見落としていた現代的な問題を再考する契機となりうる。このような意味で、心霊主義について考察することは現代においても意義のあることだといえよう。

本稿は19世紀末ドイツで活動した、代表的な心霊研究者・哲学者であるカール・デュ・プレル(1839-1899)をとりあげ、その心霊研究を概観し、彼がとりわけ自然科学や技術といった方面の知識をどのように心霊研究と結合させたのかを探り、彼の心霊研究の今日的な意義について考察することを目的とする。

本稿は、日本独文学会秋季研究発表会(名古屋市立大学、2009年10月17日)におけるシンポジウム「神秘主義的世界像と自然科学」(発表者: 福元圭太、田村和彦、門林岳史、熊谷哲哉)での発表「カール・デュ・プレルにおける科学技術と心霊研究」をもとに加筆修正したものである。

1. カール・デュ・プレルの心霊研究とモデルネ

はじめに、長く忘れられていた思想家の一人であるカール・デュ・プレルという人物について簡単に説明しておきたい。デュ・プレルは1839年、バイエルンのランツフートで、フランス出身の貴族の家系に生まれた。大学で法学および哲学を修めた後に、陸軍に入隊し、普仏戦争に従軍したが、1872年に退役し、以後は在野の研究者としてミュンヘンを拠点に活動した。デュ・プレルの研究活動は、1868年に学位論文として提出された『夢解釈、超越論的観念論からみた夢について』という論文を出発点としている。¹ 軍職を退いた後、とりわけ1880年代以降、デュ・プレルは矢継ぎ早に著作を刊行している。代表作である、『叙情詩の心理学』、『惑星の居住者と星雲説』（ともに1880年）、『宇宙の発達史』（1882年）、『神秘哲学』（1885年）、レクラム文庫として刊行された『人間の謎』（1892年）、および『心霊主義』（1893年）、そして唯一の“催眠術的・心霊主義的長編小説”の『氷河の十字架』（1891年）などはこの時期に発表された。²

デュ・プレルは自らの学問的・思想的立場として、**Spiritismus** という語を用いている。この語が単にひとつの「主義」を意味しているのではなく、学問分野のひとつとして位置づけようとしていることから、本稿では「心霊主義」または「心霊研究」という訳語を用いることにする。³ デュ・プレルの心霊研究は、従来の宗教的・秘教的なイメージでとらえられがちな神秘体験や霊的現象を、より科学的に解明しようとした点に特徴がある。すなわち、伝承や個人的な体験、修業などを重視するのではなく、実験や観察そして文献資料などを駆使し、検証可能な自然科学的な現象として心霊主義に取り組んだのである。

デュ・プレルの学問的な関心は、青年期から取り組み始めた哲学研究が生涯を通じてその中心となっていた。彼の思想に大きな影響を与えた人物として、カント、ショーペンハウアーそして同時代の在野の哲学者エドゥアルト・フォン・ハルトマンが挙げられる。特にデュ・プレルと同世代のハルトマンは、ショーペンハウアーの意思の哲学を発展させ、世界を動かす原理として無意識をすえようと試みたことで知られるが、書簡による交流を通じて、デュ・プレルのライバルであると同時に師であったと言われる。デュ・プレルは哲学を出発点に、天文学、

¹ Du Prel: Oneirokritikon. Der Traum vom Standpunkt des transcendentalen Idealismus. In: *Deutsche Vierteljahresschrift*, April 1869, S. 188-241. Diss.

² デュ・プレルの主な著作の書誌情報は以下の通りである。*Psychologie der Lyrik*. Leipzig 1880; *Die Planetbewohner und die Nebularhypothese*. Leipzig 1880; *Entwicklungsgeschichte des Weltalls*. Leipzig 1882; *Philosophie der Mystik*. Leipzig 1885; *Das Kreuz am Ferner. Ein hypnotisch-spiritistischer Roman in 2 Bänden*. Stuttgart 1891; *Das Rätsel des Menschen*. Leipzig 1892; *Der Spiritismus*. Leipzig 1893.

³ また、デュ・プレルは自らの学問的な立場を表すのに、**Spiritismus** だけでなく、「オカルティズム (Okkultismus)」という語も用いている。デュ・プレルにおいて両者の用語の意味に大きな違いはない。

ダーウィン流の進化論、詩学など、豊富な学識を駆使して、狭義「心霊」研究には収まらない、心理学、哲学、宇宙進化論、文学など幅広い分野にまたがる研究・執筆活動をおこなった。

このような試みの一つとして、彼はミュンヘンで心理学会 ― のちの実験心理学会 ― を結成し、催眠術の研究者でもあった精神科医のアルベルト・フォン・シュレンク-ノッツィングらとともに、オカルト現象の実験的・科学的な検証に努めた。⁴ このときの研究成果は、心霊主義者たちに広く読まれた『心理研究』や『スフィンクス』を始めとするオカルティズムの専門誌だけでなく、大衆向け科学雑誌や文芸誌にも論説として発表された。⁵ デュ・プレルの著作に影響を受けた人物として、リルケやリヒャルト・デーメル、オスカー・パニッツァ、ヘルマン・バルなど、モデルネの作家たちを挙げることができる。とりわけリルケは、1890年代後半に晩年のデュ・プレルと個人的な親交をむすび、彼を讃える詩を贈っている。⁶ 1880年代から 90 年代の半ばにかけて、ドイツを代表する心霊研究者として数多くの著作と論考を残したデュ・プレルは、1899 年に 60 歳の誕生日を迎えたのちに亡くなった。⁷ デュ・プレルがもっとも旺盛に活動した、1880 年代から 90 年代なかばまでの 10 余年は、いわばドイツにおける科学的オカルティズムの最盛期であったといえる。1894 年以降、デュ・プレルは雑誌への論文の寄稿などの活動をほとんど行わなくなったが、そのかわりに台頭したのは、フランツ・ハルトマンやブラヴァツキー、シュタイナーのような、ある種の秘教的な個人の経験 ― 修行や神秘的な体験など ― に依拠する神智学や人智学としてのオカルティズムであった。また、デュ・プレルが取り組んだような科学的に心霊現象を解明しようという方向性は、マックス・デソワールが創始した超心理学として現代に受け継がれている。

これまでオカルティズムや超心理学の文脈以外では、ほとんど忘却されていたデュ・プレルであるが、1990 年代以降、ドイツにおける思想史的・文学史的な研究において、再評価の動きが高まっている。⁸ デュ・プレルをヘッケルやベルシェら一元論者と並べて論じた Fick を始

⁴ フロイトと同時代にパリのシャルコーのもとで催眠を学んだ、シュレンク-ノッツィング (1862-1929) は、催眠状態の霊媒を使ったダンスの上演を試みたり、今日エクトプラズムとして知られる、霊魂の物質化現象を観察したことで知られる。

⁵ Kaiser はデュ・プレルが寄稿した多数の雑誌記事について詳細な書誌情報をまとめている。それによれば、デュ・プレルが寄稿した雑誌は専門誌だけでなく、*Die Gegenwart*、*Wiener Rundschau*、*Die Presse* (Wien) などの情報誌・文芸誌も含まれていたことが分かる。Vgl. Kaiser, Tomas H.: *Zwischen Philosophie und Spiritismus. Annäherungen an Leben und Werk von Carl du Prel*. Saarbrücken 2008, S. 214ff.

⁶ デュ・プレルとリルケの関係については、Magnússon, Gísli: *Dichtung als Erfahrungsmetaphysik*. Würzburg 2008 に詳しい。

⁷ デュ・プレルの生涯については、Du Prel: *Die Psyche und das Ewige*. Hrsg. v. Anton Brieger. Pforzheim 1971 に収録された、編者 Brieger による詳細な解説を参考にした。

⁸ デュ・プレルとその思想が忘れられてしまった要因として、Kaiser は、思想としての価値だけでなく、第二次大戦時に空襲でデュ・プレルの子孫の家が破壊され、貴重な資料が失われてしまったことを挙げてい

め、Treitel、Sawicki、Pytlik などは、デュ・プレルを世紀転換期におけるドイツ・オカルティズムの中心人物として取り上げている。⁹ さらにデュ・プレルの独自の宇宙論については、Crowe、Clausberg などが言及している。¹⁰ また、Kaiser は大量の資料や書簡を渉猟し、初めての伝記的な研究をまとめた。¹¹

本稿では、これらの先行研究を参考に、デュ・プレルの心霊研究と同時代の科学、および大衆科学ブームとの関連を探り、そこからデュ・プレルの心霊研究の目的について追求したい。

2. 大衆科学の流行と心霊研究

19 世紀から 20 世紀初頭にかけて、全世界的にたいへんな影響力を持っていたのが、ダーウィンの進化論であった。1859 年に『種の起源』として刊行されたダーウィンの思想は、その二次創作的な“ダーウィン主義者”たちの言説も含めて、ヨーロッパの知識人だけでなく、市民たちにも共有されるようになった。19 世紀半ば以降、ドイツでは一般市民向けの科学書や科学雑誌が多数刊行されたり、講演会が開かれたりして、人々の関心を引きつけた。この大衆科学ブームの牽引役となったのは、大学の教授たちだけではなく、大学で学んだものの、研究者として大学に残るのではなく、在野で執筆・講演活動を続ける — 今日でいえばサイエンスライターに当たるような — 人々が、科学的知識の普及の担い手となっていたのである。大衆科学の普及者の代表的な例として、エルンスト・ヘッケルやヴィルヘルム・ベルシェ、エルンスト・クラウゼ、ヴィルヘルム・マックス・マイヤー、ルートヴィヒ・ビューヒナー、ヤーコプ・モレスコットといった人物をあげることができる。¹² これらの人物たちが、おもに論じたのは、先に挙げたように進化論的な生物や宇宙の歴史である。たとえばエルンスト・ヘッケ

る。Vgl. Kaiser, S. 14.

⁹ Fick, Monika: *Sinnenwelt und Weltseele*. Tübingen, 1993; Treitel, Corinna: *A Science for the Soul*. Baltimore 2004; Sawicki, Diethard: *Leben mit den Toten*. Paderborn/ München/ Wien/ Zürich 2002; Pytlik, Priska: *Okkultismus und Moderne*. Paderborn/ München/ Wien/ Zürich 2005.

¹⁰ Crowe, Michael J.: *The Extraterrestrial Life Debate, 1750-1900*. Cambridge 1986; Clausberg, Karl: *Zwischen den Sternen: Lichtbildarchive*. Berlin 2006.

¹¹ Kaiser, a.a.O. なお本書についての文献紹介として、拙稿：「文献紹介 Tomas H. Kaiser: *Zwischen Philosophie und Spiritismus. Annäherungen an Leben und Werk von Carl du Prel*」：京都大学大学院現代文明論講座文明構造論分野『文明構造論』第 5 号（2009 年）、189~198 頁所収がある。また、デュ・プレルの邦語文献への登場は、平井金三『心霊の現象』警醒社書店 1909 年やラファエル・フォン・ケーベル『ケーベル博士随筆集』（久保勉 編訳）岩波書店 1957 年などで言及されて以来ほとんど皆無であった。なお、邦訳として、拙訳：「いかにして私は心霊主義者となったか — 『心霊主義』より」：京都大学大学院現代文明論講座文明構造論分野『文明構造論』第 6 号（2010 年）、131~153 頁所収がある。

¹² 普及者については、Daum が、この時期に活動した 200 人を超える人物について、その知的背景や経歴、中心的なテーマについて詳しく分類を試みている。Vgl. Daum, Andreas W.: *Wissenschaftspopularisierung im 19. Jahrhundert*. München 2002, S. 385f.

ルは『自然創造史』(1868年)などにおいて、微生物から霊長類、人類に至る長大な進化の歴史を物語っている。

初期のデュ・プレルもまた、このような時代の流行を敏感に感じ取り、1874年には、宇宙における惑星たちの生存競争をテーマとした著作『天上における生存をめぐる闘い (*Der Kampf ums Dasein am Himmel*)』、そして1880年にはその続編として、『惑星の住人たちと星雲説』を発表している。デュ・プレルも含め、この時代の大衆科学本に共通しているのは、「発達 (*Entwicklung*)」や「進歩 (*Fortschritt*)」というキーワードのもとに、輝かしい自然界の歴史とオプティミスティックな未来像を語るというスタイルであったと Daum は述べている。¹³ 彼らは発達と進歩を続ける自然の歴史と、自分たちがおかれた状況とを重ね合わせて、科学の更なる発展と人類の進歩を夢見ていたのであろう。

大衆科学の流行とほぼ同時期に、ドイツを含め欧米では、心霊主義も流行の兆しを見せ始める。とりわけよく知られているのは、1847年にアメリカ人のフォックス姉妹が、霊との交信に成功したというエピソードである。これをきっかけに、1850年代のアメリカには、心霊主義を研究するサークルや学会が組織され、さらにヨーロッパにも心霊主義を広めようと多くの使節団が訪れたという。1869年にはイギリスで心霊研究協会が組織され、科学的な知識を持った人々も心霊研究に関与するようになった。¹⁴ ドイツにおける科学的心霊主義の代表的な人物は、ライプツィヒ大学の物理学教授であったツェルナーである。ツェルナーは1877年に、イギリス人の霊媒ヘンリー・スレイドとともに公開実験を行い、その結果、心霊現象の中に、ある種の四次元空間の通過現象が見られることを報告している。¹⁵ 心霊現象を解明するのに、専門的な教養をもった自然科学者が関与したり、自然科学の知識が用いられたりすることが、この時代の心霊主義の最も大きな特徴である。大衆科学と同様にまた、心霊主義も、専門誌や家庭雑誌・文芸誌などのメディアを通じて広く普及してゆく。デュ・プレルも1886年に、ミュンヘンにおいて「心理研究会」を組織し、雑誌『心理研究』および『スフィンクス』の中心的な寄稿者として、古代における心霊現象の紹介から、人間の無意識と文学的創作の関係、さらには科学的な心霊現象の解明にいたるまで、幅広い記事を投稿した。

¹³ Daum, Andreas W.: Das versöhnende Element in der neuen Weltanschauung Entwicklungsoptimismus, Naturästhetik und Harmoniedenken im populärwissenschaftlichen Diskurs der Naturkunde um 1900. In: Drehsen, Volker/ Sparr, Walter (Hrsg.): *Vom Weltbildwandel zur Weltanschauungsanalyse. Krisenwahrnehmung und Krisenbewältigung um 1900*. Berlin 1996, S. 203-215, S. 208.

¹⁴ イヴォンヌ・カステラン『心霊主義』(田中義廣 訳) 白水社 1993年。

¹⁵ ツェルナーの実験とは、具体的には紐と輪を複雑に絡み合わせたものを、間に入っている物を壊したり、蟻による封緘をはがしたりせずこぼく実験や、その場にはないものを出現させる実験「アポーツ」である。ベルリンでの公開実験には、フェヒナー、ヴントなどの著名な科学者たちが参加した。Vgl. Sawicki, S. 303.

大衆科学の流行と、科学を参照する心霊主義の興隆は、もちろん問題を共有していると考えられる。すなわち、両者の間に通底する問題意識として、進化論的世界観への関心、そして科学技術文明によるこれまで不可解であった謎の解決可能性への期待があったのではないだろうか。大衆科学においては、進化論という原理によって、宇宙や自然や生物の全体的な歴史が、一連の発達と進歩を繰り返すストーリーとして描き出されたように、心霊主義の領域では、これまで不可解であった動物磁気や流体理論、無意識や夢遊状態、そして幽霊や死後の世界といった事柄が、科学による新たな法則や知見によって説明できるようになったのである。

デュ・プレルは、晩年の大著『自然科学としての魔術』において、実際に心霊現象を、最新の科学技術を用いて説明しうるようになったと述べ、テレパシー的な思考の伝達もまた、説明可能であると述べている。

レントゲン線と無線電信が発明されて、透視とテレパシーが物理的に説明可能となつたいまや、人間の器官から出てくる放射を遠隔的な効果へと移すことができるような何らかの発見がなされれば、人間を絶えず複雑化してゆく機械のように見なすようになるかもしれない。それぞれの思考伝達というものは、このような形の物理的過程を基盤としているはずである。そこにおいては、一つの脳から発せられたものは、波状に伝わって、可逆性の原理に則り、同じような感覚器官を有する二つ目の脳と出会った際に、再び一つの思考へと変換されるのである。¹⁶

実験や観察 — その多くは自分で行ったものではなく、先行研究の実験データを二次的に利用したものだったが — や、古い文献などにおける超常現象を、科学技術の言葉を使って、技術とのアナロジーで説明する、というのがデュ・プレルにおける特徴的な方法である。

当時からすでに、デュ・プレルや他の心霊主義者における科学性を批判する声はもちろんあった。¹⁷ しかしながらおそらくデュ・プレルが心霊研究に取り組んだ目的は、心霊現象を、誰もが納得する科学的な法則によって説明することではなかったはずだ。デュ・プレルは、レクラム文庫『心霊主義』に収められた小論「いかゞして私は心霊主義者となったか」におい

¹⁶ Du Prel: *Die Magie als Naturwissenschaft*. Leipzig 1899, S. 22f.

¹⁷ Sommer は、デュ・プレルがすでに彼のもっとも近い仲間である、シュレンク-ノッツィングやヒュッペシュライデン（雑誌『スフィンクス』の編集者。細胞説を唱えた植物学者シュライデンの息子で、植民地駐在員であったが、のちに心霊主義者・神智学者として活動した）らによって、方法論や用語のずさんさを批判されていたことを指摘している。Sommer, Andreas: From Astronomy to Transcendental Darwinism: Carl du Prel (1839-1899). In: *Journal of Scientific Exploration*, Vol. 23, No.1. (2009), pp. 59-68, p. 64.

て、みずからの学問的な歩みと心霊主義への取り組みを紹介している。その中で、デュ・プレルは、オカルティズムとは、将来的な世界像の構築に向けての中間的な段階であり、また「オカルティズムは、いまだ知られていない自然科学に過ぎず、それは将来の自然科学によって証明されることになる」¹⁸ と述べている。そのために、さまざまなオカルト現象を科学的に解明するべく、経験的な事実を集めることが必要であるというのだ。デュ・プレルにおける心霊主義の射程とは、科学的な真実の追究という問題よりも、さらに広い地平、つまりオカルティズムによる新たな世界観の樹立という目標を視野に収めていたと考えられる。

3. 空中浮揚と器官投射 — 心霊主義と人間の発達可能性

先に述べたように、デュ・プレルは、実験や文献だけでなく、技術とのアナロジーによって心霊現象を説明しようとした。このような方法論をデュ・プレルが見いだしたきっかけになったのが、哲学者で教育家でもあったエルンスト・カップの『技術の哲学についての基礎論』（1877年）という本で展開された「器官投射（Organprojektion）」という概念である。カップは以下のように説明している。

職人におけるいわゆる“道具”や、芸術における楽器、最も小さなものや速度を計測するような学問における装置、人間による音や発話によって動かされ作られる空気の波動といったものは矛盾なく、カテゴリにおける、物質へと形成された投射に属するのであるが、私はこれらを、ピュシスまたはプシュケあるいはその両方が合わさった一元論的な解釈のどれが強調されているかを考慮に入れずに、実際に器官投射と呼ぶことにした。（傍点は原著者）¹⁹

器官投射とは、人間の手で作られた機械や道具は、意図せずとも必ず人間の何らかの機能を模倣し、拡張したものとなっているという説である。デュ・プレルは、カップの説を受けて、このように説明している。

すなわちカメラ・オブスキュラの場合、決して意図的に目を模倣して作られたのではなく、翻って、カメラが発明されたことで初めて、私たちの目の仕組みがわかったのである。（中略）同様に、ピアノを引き合いに出すことで、聴覚器官が理解できるし、

¹⁸ Du Prel, *Der Spiritismus*, S. 15.

¹⁹ Kapp, Ernst: *Grundlinien einer Philosophie der Technik*. Braunschweig 1877, S. 27.

電信によって神経の機構が理解できるのである。²⁰

デュ・プレルは、心霊現象のなかに器官投射の実際を見ようとしている。それは、彼にとって、技術を通じて人間の未来の姿、すなわち人間の器官のさらなる発達可能性を模索することであった。『自然科学としての魔術』のなかで、デュ・プレルはさまざまなオカルト現象を例に、科学的な解明の道を探っている。ここで取り上げられるのは、たとえばテーブルターニング（いわゆるこっくりさん）、テレパシー、千里眼、空中浮揚、動物磁気、オド²¹、占い棒（ダウジングのようなもの）、特定の場所に石が降ってくる怪現象、などである。ここではそのなかでもとりわけ世紀転換期の科学技術文明と関連が深いと考えられる、空中浮揚現象について取り上げ、それをデュ・プレルがどのように捉えたのかを考察する。

空中浮揚現象とは、簡単にいえば物体や人体が、重力の影響を離れて宙に浮く現象のことである。そこには、トランス状態の霊媒がテーブルを動かす現象（*Tischrücken*）や、エクスタシー状態の霊媒が宙に浮かぶ現象などが含まれる。デュ・プレルはこのような現象が生じる原因を、重力から浮揚する力への転換にあるのではないかと考えている。

物理学者たちにとって謎めいた重力が、電氣的な引力であり、それゆえニュートンの万有引力の法則が、ヴェーバーの電気力学の法則における特別な場合として捉えられるのであれば、重さを持った、引き寄せられた身体は、その電氣的な極性が変わったなら、すぐに引きつける力は押す力へ、重力は浮揚する力へと変わるだろう（*die Gravitation in Levitation verwandelt werden*）。²²

デュ・プレルは人間の身体をマイクロコスモスであると述べ、人間のうちには、自然界のあらゆる力が備わっているのだとしている。²³ それゆえ、空中浮揚現象は、いまだ未知な人間の能力によって説明することができる。つまり、人間の身体には、引力を浮揚力へと転換させる能力がそなわっているというのだ。²⁴ むろんこのような説明は、まさに仮説でしかないのだが、重

²⁰ Du Prel: *Das Rätsel des Menschen*. Ulm 1986, S. 71.

²¹ オド（Od）とは化学者ライヒェンバッハが、1845年に発表した説で、動物磁気と同様、あらゆる生体や物質に備わるエネルギーのようなもの。磁気説にたいし、流体説と呼ばれる。カール・フォン・ライヘンバッハ『神秘のオド・パワー：もうひとつの科学史の発掘』（岡田圭吾 訳）日本教文社 1987 年を参照。

²² Du Prel, *Die Magie als Naturwissenschaft*, S. 152.

²³ Ebd.

²⁴ そのような力が存在する証拠のひとつとして、デュ・プレルは「おそらく夢においてよくある浮遊したり飛んだりといったことは、空中浮揚の入り口となる疑似的な感覚であろう」と述べている。Vgl. ebd., S. 162.

要なのは、デュ・プレルが浮揚力が存在する可能性から、人間が将来的に自由に空を飛べるようになるかもしれないということを構想している点である。

エクスタシー状態における空中浮揚が、技術的な飛行の自然における原型であるとするれば、極性の転換からエクスタシー的飛行が生じるという先の説明は、技術的な飛行への道しるべとなるだろう。²⁵

器官投射の考えを応用すれば、人間が作り出した道具や機械の中に、人間の器官や性質を理解するための鍵が得られるように、空中浮揚現象という人間の未知なる能力を分析することで、逆に機械的・技術的に、空中に浮くための方法が理解できるのではないか、というのがデュ・プレルの考えである。もちろんここでデュ・プレルが述べる飛行の可能性とはまったく異なる方法で、わずか数年後 — ライト兄弟の飛行は1903年 — に人類は人工的に飛行する方法を開発し、みごと成功をおさめるのであるが、ここでデュ・プレルが念頭に置いているのは、器官投射として提示される人間の未知なる能力、つまりさらなる発達を遂げた人間というイメージであると考えられる。

デュ・プレルは、『宇宙の発達史』（1882年）において、進化論的生存競争と自然淘汰の原理によって、宇宙全体の生成を論じたが、彼にとっての進化論とは、単に惑星や生物の歴史的変遷を論じるための理論に留まらない。デュ・プレルは人間のさらなる進化の可能性を、生物が個々の環境に適応して、身体や器官を作りかえていったように、新たな適応の仕方として捉えている。²⁶ そして彼の思想によれば、人間の進化は死後の世界にも及ぶ。人間は、死後に別の身体（アストラル体）をもって、さらなる進化を続けてゆく。死とは、肉体と精神の消滅を意味するのではない。私たちにとっての、見える世界が変化するだけのことだというのだ。

それゆえ魂と身体の違いは、感覚的な直観の変化にある。すなわち別の世界である。別の世界とは、しかし別の場所ではなく、単に別の直観を意味するのである。（強調は原著者）²⁷

生の世界と死後の世界とは、夜と昼のように、私たちにとっての見え方の違いでしかない。つまり感覚的に捉えられるか否かによる違いであり、彼岸と此岸とは、私たちの感覚関

²⁵ Ebd., S. 169.

²⁶ Du Prel, *Spiritismus*, S. 15f.

²⁷ Du Prel, *Das Rätsel des Menschen*, S. 89.

(Empfindungsschwelle) によって隔てられているに過ぎないのだ。²⁸ そしてこの感覚閾は、可変的なものであり、催眠状態や夢遊状態の人間が、目覚めている状態ではなしえなかったようなことをするように、詩人などの靈感豊かな人間、死者や霊媒などといった人々は、通常の人間が生きている感覚の世界とは、別の世界を同時に生きている。通常感覚とは別の、いわば超感覚的な世界をかいま見、そこから詩人であれば、芸術的なイメージを得ているし、霊媒であれば、死者との交流が可能になったりする。デュ・プレルにおいて、人間とはヤヌスのように二つの顔を持つ存在である。すなわち彼岸と此岸、意識状態と無意識状態という二つの、相通じることのできない場に、同時に存在するのである。この両者の存在を統合する、いわば通常の自己よりも上位の次元の自己意識を、デュ・プレルは「超越論的な主体」(das Transcendentale Subjekt) と名付け、このことについて探求することを心霊主義の大きな目標として掲げたのである。

そしてデュ・プレルは、心霊主義の学問的な立場、つまり既存の自然科学との関係をこのようにまとめている。

彼岸とは、それゆえ私たちの器官が適合しない現世の一部分なのである。そこには奇跡によって置き換えられるような因果性を持った形而上学は存在せず、むしろある別の形での因果性を持ったある種の形而上学があるのだろう。あらゆる形而上学は単なる未知の自然科学である。そうすると自然科学の進歩をもくろむ者たちは当然のことながら、オカルティズムを研究することになるだろう。自然科学者たちがオカルティズムの断固たる敵となっているというのは、まったく逆の事態である。すなわち自然科学者たちは、オカルティズムが自然科学と相容れない領域であるというまったく誤った理解をしているのであるが、実のところオカルティズムは、自然科学の欠落を埋めるものなのである。オカルティズムはたしかに私たちが知らない自然の力を提示するが、ここでは物理学の実験室におけるように、因果性が成立しているのだ。オカルト的な力は、それゆえ研究の対象とならないが、むしろ技術的な応用は可能なのである。²⁹

²⁸ Pytlik が指摘するように、デュ・プレルの心霊主義における生と死の区別をめぐる議論の中核となる、「感覚閾」についての考えは、フェヒナーの理論に大きな影響を受けている。とりわけ意識と無意識を隔てる境界が、可動的なものであり、催眠状態や夢遊状態において、この境界を越えることができるという点にデュ・プレルの魂についての思考の中心がある。Pytlik (Hrsg.): *Spiritismus und ästhetische Moderne – Berlin und München um 1900*. Tübingen 2006, S. 48.

²⁹ Du Prel: *Der Tod, das Jenseits, das Leben im Jenseits*. Leipzig 1899, S. 57.

デュ・プレルにおける心霊主義とは、いまだ自然科学の研究対象とはなりえない現象をも研究対象として取り込む、いわば過渡的な、未来の自然科学なのである。

4. デュ・プレルの心霊研究と社会

この節では、デュ・プレルにおける人間の発達可能性へと向かう心霊主義が、同時代の社会においてどのような意味を持っていたのかという問題について考察する。デュ・プレルが未来の自然科学として構想した、科学的な心霊主義が探求したのは、人間の未知なる感覚や能力であり、さらなる発達の可能性である。人間は、死による肉体の消滅という物理的な終焉を克服し、将来的には宇宙空間に生の場所を見だし、星々の間を、他の惑星の住人とともに生きていくだろうと、彼は夢想している。³⁰ デュ・プレルは、死者の魂としての人間は、さらに発達を続け、最終的には身体を持った、より完成度の高い人間として生まれ変わるということも予想している。

この過程の最終目的は、すなわち魂の所有から、その地上の現象形態へとよりいっそう豊かに流れ込み、生まれ変わりへの道となることだろう。それゆえついには、超越論的主体を備え、地上の現象形態と完全に一体化し、あらゆる無意識が意識に組み入れられているような被造物を、地球は生み出すことになるだろう。³¹

身体と、身体的な感覚の制限を超えた、超越論的主体を備え、さらには無意識も意識も両方を備えた生命が誕生するということは、それはもはや新たな人類ではなく、ある種の神の創出に等しいのではないだろうか。デュ・プレルにおける死後の人間の発達、という考えは、当然のことながらある種の宗教性を帯びるようになる。それは既存のキリスト教的な宗教性を否定しようところみた、ヘッケルらの一元論が、新たな宗教へと発展していったこととも近いのではないだろうか。

しかしながら、デュ・プレルの思想は最終的に宗教を生み出すには至らなかった。この理由を、オカルティズムの歴史をまとめた Sawicki は、デュ・プレルにおける社会性の欠如、すなわち社会へのまなざしの貧しさに帰している。³² デュ・プレルにおける人間の発達とは、たんに個人としての問題でしかなく、社会とのつながりの欠如は、「彼の理論における盲点」³³ で

³⁰ Ebd., S. 116.

³¹ Du Prel, *Das Rätsel des Menschen*, S. 132.

³² Sawicki, S. 334.

³³ Ebd.

あるというのだ。

もっぱら浮世離れした心霊主義の研究に生涯を捧げたように見えるデュ・プレルであるが、彼が一冊だけ社会問題について論じた本が残っている。それは、『人種の改良の手段としての出生前教育』という小冊子である。³⁴ この本の中でデュ・プレルは、当時の進化論的オプティミズムと同時に存在した、頽落 (Degeneration) への不安 — つまり進化論において、進化する種がある一方で、劣った個体が続いたために自然淘汰されてしまう種があるように、人類が頽落へ向かう恐れ — に対してどのような対策があるのかを論じている。デュ・プレルは、母親が妊娠中に見た夢や体験したできごとが子供へと反映される現象 (Versehen) の事例を分析しながら、母親と子供の関係は、いわば磁気術師と夢遊症者との関係に等しいと考えている。³⁵ つまり無意識状態で経験したことが、そのまま産まれてくる子供へと反映される可能性があるということだ。そして、母体と胎児との間のテレパシー的な交信によって、出生前教育として、芸術や学問的知識を授けるべきであるというのだ。この本では、出生前教育だけでなく、実際に生じているさまざまな社会問題への解決策についても論じられているのだが、そこで展開されるのは、ある種の社会ダーウィニズム的な決まり文句の繰り返しでしかない。

多くの犯罪者たちには、もちろん流刑だけでなく、さらには断種も施すこともできよう。さしあたりはアナーキストに対して行われるべきである。とはいえそのような方針ではいまだ不十分であろう。人間性の根本的な再生および計画的な人種の改良、それらは出生前教育の助けなしには達成され得ないのである。³⁶

また、デュ・プレルはルートヴィヒ・ビューヒナー (ゲオルク・ビューヒナーの弟で、19世紀後半に多大な影響力を持った『力と質量』の著者) に代表されるような唯物主義的自然科学者たちを敵として批判している。唯物主義の広まりが、社会の不安につながっているというのだ。彼によれば、唯物主義者たちのいわば現世利益的な世界観が、道徳性の後退を招いており、心霊主義がいうように、魂は不死であり、死後も発展を続けるということがもっと世の中に広く証明されなければならないと述べている。³⁷

デュ・プレルにとって批判の対象となるのは、唯物主義者たちだけではない。心霊主義ブームの背景には、キリスト教的世界観への批判が含まれていたことはいうまでもない。キリスト

³⁴ Du Prel: *Die vorgeburtliche Erziehung als Mittel zur Menschenzüchtigung*. Jena 1899.

³⁵ Ebd., S. 6.

³⁶ Ebd., S. 31.

³⁷ Du Prel, *Das Rätsel des Menschen*, S. 158f.

教への懐疑と唯物主義は、大衆科学における発展的な進化のイメージともリンクしていたのだ。デュ・プレルがキリスト教を批判するのは、その圧制的な教条主義のためである。すなわち、自然科学の時代を迎えた今日、教義や神秘について、もはや盲目的に信じさせるというキリスト教会の方法では、不信心者の増大を抑えることはできない。これからは、信じさせるのではなく、理解させること、つまり科学的な説明と証拠によって納得させることが必要なのであるというのだ。³⁸ そして心霊主義こそが、社会に開かれた思想、それは旧来のエリート主義的なごく一部の教養人のみを対象にした哲学ではなく、いっぽうドグマティックな宗教ともことなる、一般的な大衆のための知識として、経験的な事実によってたち、実験的に探求される心霊主義こそが、未来の世界観となるべきなのだとデュ・プレルは強調している。このような方向性、つまり 19 世紀後半における自然科学的知識の普及と同じように、一般大衆を巻き込み、それらの人々にとっての代替的な宗教となろうとしたところに、デュ・プレルらが実践した科学的心霊主義のもっとも大きな特徴があるのではないだろうか。

おわりに

最後に、本稿全体をまとめ、デュ・プレルの心霊研究について、どのようなさらなる探求の余地があるかということについて考えを述べたい。

本稿では、以上のように、カール・デュ・プレルの心霊研究において、自然科学的な知識と心霊現象への探求という、現代に生きる私たちからすれば相反するように見える二つの方向性がどのように両立していたのかという問いを出発点として、彼の思想におけるとりわけ人間の発達という問題を考察した。デュ・プレルにおける科学と心霊研究は、人間の発達可能性という点において交差する。器官投射説として彼がたびたび言及していたように、人間がつくった機械や技術のなかには、無意識的に人間のもっている器官や能力を解明するしくみが宿っている。それを解明し、応用することで、不可思議な心霊現象も、これまでは不可能とされていた技術も、同じように説明可能となるし、そこで発見された人間の能力は、将来的な発達の可能性へとつながるのである。このようなデュ・プレルの思考は、もちろん今日の私たちから見ればあまりにも無理があるし、科学的ともいいがたい。だが、彼の思想が多く読者の支持を得て、ある意味一つの時代を作っていたというのも事実である。デュ・プレルの思想が人々を引きつけた要因としては、Kaiser が詳しく検証したように、大衆科学の普及者や大学人、出版人とのネットワーク作りなど、非常に優れた戦略性もあるだろうし、³⁹ 彼の著作に展開された理論が、同時代の人々における、科学的な説明によっては満足しきれないファンタジーを喚起

³⁸ Ebd., S. 158.

³⁹ Vgl. Kaiser.

したということも考えられよう。⁴⁰

デュ・プレルの著作が、人間の発達可能性という一貫した方向性を持ちながら、天文学・自然史・文学・心霊研究と、さまざまな対象を扱っていたことから、彼の持っていた幅広い関心を窺い知ることができるし、そこから私たちは、デュ・プレルおよびモデルネにおけるさまざまな問題を考察することができる。本稿では詳しく論じることができなかったが、デュ・プレルは、夢遊状態や無意識状態への探求から、人間の夢や、夢と昼間の人間の意識との関係についても言及している。この分野における代表的な著作である『神秘哲学』については、フロイトが『夢解釈』において幾度か言及している。⁴¹ デュ・プレルの方法論や目的は、もちろん精神分析の科学性とは相容れないのだろうが、彼らが問題を共有していたという点については、より深く掘り下げてみる必要がある。また、彼の宇宙進化論や人間の発達についての思考においては、なんらかの合目的性（Zweckmäßigkeit）が存在し、それによって自然の法則や世界の変転が導かれているという考え方が見られる。このようなある種の目的論的思考とダーウィニズムの自然観がどのように両立していたのか、そして先にも述べたように、なぜ宗教とならなかったのか、という点についても、再考の余地があるし、他の一元論者たちの言説と比較してみることで、デュ・プレルの思想の独自性や、文脈といったものが理解できるだろう。

デュ・プレルは夢遊状態の人間の精神を実験や観察から探求し、人間の精神活動という観点から独自の世界観を構想した。私たちの言語や思考、道徳といった精神の活動をどのように捉え、どこに位置づけるのかという問題は、心霊主義や精神分析だけでなく、文学や芸術も含め、20世紀の人文諸科学全体に関連する課題である。このような問題に対して、デュ・プレルを始めとする心霊研究者たちの大胆な仮説や想像力に富んだ発想は、今日の私たちに新たな洞察を得る手がかりを提供しうるといえるだろう。

⁴⁰ デュ・プレルの著作がモデルネの文学者に影響を与えたことはすでに述べたが、デュ・プレルの信奉者としてもう一人忘れてはならないのが、フロイトの論文によって広く知られることになった精神病患者ダニエル・パウル・シュレーバーである。シュレーバーの『ある神経病者の回想録』では、デュ・プレルの『宇宙の発達史』が幾度も読み返した本として繰り返し言及されている。端的に言えば、シュレーバーにおける、通常の人間には不可能な神との直接的な交信、すなわち「神経接続」という現象も、彼のみが世界滅亡後の世界に生きているという世界観も、デュ・プレルのいう彼岸と此岸を隔てる感覚閾の超越という発想や神の似姿としての「超越論的な主体」という考えにきわめて近いと考えられる。デュ・プレルとシュレーバーの関係については、拙稿「目的・進化・自由意思 — シュレーバーにおける世界認識の問題」：日本独文学会京都支部会『Germanistik Kyoto』第9号（2008年）21～38頁所収を参照。

⁴¹ デュ・プレルとフロイトにおける夢と文学的創作の関係については、拙稿「カール・デュ・プレルの夢研究について—フロイトとの比較を通じて」：日本独文学会中国四国支部会『ドイツ文学論集』第40号（2007年）47～56頁所収を参照。

Wissenschaft und Entwicklung des Spiritismus bei Carl du Prel

KUMAGAI Tetsuya

Carl du Prel (1839-1899) war ein berühmter, einflussreicher Spiritist, Philosoph und Schriftsteller gegen Ende des 19. Jahrhunderts in Deutschland. Damals haben sich nicht nur die breite Masse, sondern auch die Intellektuellen für den Spiritismus und okkulte Phänomene, wie z.B. Tischrücken, Geisterseherei, Somnambulismus, Hypnose usw. interessiert. Du Prel hat viele Bücher und Artikel darüber für Zeitungen und Zeitschriften geschrieben und seine spiritistische Lehre hatte sehr großen Einfluss auf die Zeitgenossen. Außerdem gewannen seine naturwissenschaftlichen und naturgeschichtlichen Schriften und Vorreden, die der Darwin'schen Evolutionstheorie folgten, zunehmend an Popularität.

In diesem Aufsatz geht es um den Zusammenhang zwischen Naturwissenschaft und Spiritismus bei du Prel. Der Spiritismus und die Populärwissenschaft teilten in dieser Zeit die optimistische Stimmung, dass man alles naturwissenschaftlich erklären und so die Welt weiter entwickeln könne. Zuerst hat du Prel Philosophie studiert, sich anschließend die Lehren des Darwinismus und der Astronomie zu eigen gemacht und dann beschäftigte er sich schließlich mit dem Spiritismus.

Sowohl die naturwissenschaftlichen als auch die spiritistischen Schriften du Prels bewegen sich um das Problem der menschlichen Entwicklungsfähigkeit. Er versuchte, die weitere Entwicklung der menschlichen Eigenschaften anhand der „Organprojektion“-Theorie von Ernst Kapp mithilfe einer Analogie zwischen technischen Apparaten und menschlichen Organen zu erklären. Die menschliche Entwicklung bezieht sich bei du Prel nicht nur auf die biologische, naturgeschichtliche Stufe, sondern umfasst auch die fortgesetzte Entwicklung der Seele nach dem Tode.

Du Prel verstand den zukünftigen Menschen als ein Gottesebenbild, das fast Allmacht hätte. Aber seine Seelenlehre war keineswegs religiös. Er entwarf den Plan

einer Menschenzüchtung im Sinne des Sozialdarwinismus. Zugleich kritisierte er das Christentum und den Materialismus als Wurzeln der sozialen Unsicherheit. Du Prel konzipierte den Spiritismus als zukünftige Wissenschaft, die keine religiöse, dogmatische Lehre sein und mit der man nachweisbare aber noch nicht naturwissenschaftlich beweisbare Phänomene behandeln können sollte.